

2023 年度 帰国隊員支援プロジェクト 実施完了報告書
(協力活動) / 調査・研究

提出日:2024 年 8 月 20 日

氏名:近藤 咲

プロジェクト名称:グアテマラの小学生の基礎学力向上と、身に付けた学力を
地域社会に活かす人材育成を目的とする現地学習塾を継続運営するプロジェクト

実施国:グアテマラ共和国

実施期間:2023 年 7 月 1 日～2024 年 6 月 30 日

1 活動実施内容概要

2023 年 7 月末、現地協働者とボランティアスタッフと共にグアテマラ共和国ソロラ県サンティアゴ・アティトラン市にて活動地初の学習塾を開校した。指導内容は四則計算、作文、読書、楽器演奏、音楽、図画工作、道徳公民の 6 分野で、週に 2 回、午前と午後各 2 時間のクラスを開講(現地の小学校は午前校と午後校があり、学校の空き時間帯に学習塾に通えるようにしている)。10 週間を 1 タームとし、年間 4 ターム開講。施設使用料として Q50(約 1,000 円)/月の寄付をお願いしている。

学習塾の運営環境と各教科の指導体制を整え、2023 年 8 月に申請者が帰国。2023 年 9 月～2024 年 3 月の間は、申請者と現地スタッフの間で定期的なオンラインミーティングを行いつつ、現地スタッフのみで学習塾を運営。

2024 年 4 月に申請者が現地に再渡航。申請者現地不在の間のフィードバックを行う。また、音読・計算・書き取り反復練習の意義を現地スタッフと理解共有するため、佐賀県神埼市内小学校元校長の田中先生を講師に迎えて 10 週間のスタッフ研修(オンライン)を実施。

2024 年 6 月、JICA 中部主催のもと、現地学習塾起ち上げから現在の活動までの報告と学習塾授業風景の中継を現地からオンライン配信。

2024 年 7 月の申請者帰国前に、今後一年間の指導計画を現地スタッフと共に作成した。

2 活動の結果・成果

具体的に何がどう変わったか、何がどういった状態に変化したかを記述

- ① プロジェクト実施期間の 1 年を通して、申請者が現地不在の間も学習塾を継続運営することができ、2024 年 4 月の申請者渡航時にも、塾の運営維持に関する活動だけでなく次段階の活動—即ち現地スタッフの研修(詳細は②に後述)、外部者との連携教育活動(詳細は③に後述)、本活動の成果報告等—を円滑に進めることができた。

後述する成果は全てこの学習塾が継続運営できた上で成立していることである。これはひとえに本助成のご支援により、2024 年 1 月からの傭人費を現地協働者だけでなく学習塾ボランティアスタッフにも支払えるようになったことが非常に大きい。学習塾起ち上げから半年、ボランティアスタッフの熱意と誠実かつ献身的な勤務態度をみて、彼女たちの力無しで本プロジェクトは遂行できないと判断し給与の支払いを開始した。2024 年 1 月以降も現地スタッフ一同いっそうの責任感と情熱をもって学習塾での指導に取

り組んでいることを有難く思う。

- ② 2024 年 4 月に申請者が現地渡航したタイミングに合わせて、現地スタッフの研修を行うことができた。研修内容は音読・計算・書き取りを一連のルーティンとして毎日反復して取り組んだ際の脳に及ぼす作用とその学習効果について（陰山メソッドと呼ばれる学習法である）。これは現地渡航後に申請者不在時のフィードバックを行った際、次ターム（7 月）あたりから新たな指導法を試してみたいと提案したのがきっかけである。

というのも、申請者は塾開校（2023 年 7 月）当初から計算練習とともに音読も指導案のひとつとして提案していたが、音読と読書の学習効果の違いを現地スタッフに端的に説明することができず（グアテマラでは音読指導は一般的ではない）、まずは現地スタッフが提案した読み聞かせ指導と読書活動を実施することにした経緯があった。

陰山メソッドを提唱した陰山先生はまず計算を全国普及させた教育者でもあり、まず計算は本学習塾でも取り入れているので、音読とまず計算の学習効果について改めて学ぼうというのが研修をお願いする当初の動機であった。主任講師は陰山メソッドを全校活動として取り入れ大きな成果を出した実体験をもつ佐賀県神埼市内小学校元校長の田中先生にお願いし、ゲスト講師として陰山先生自ら参加された回もあった。

この研修でわかったことは、計算・音読・書き取りを反復することで得られる計算力・暗記力・語彙力の向上、流ちょうな発話といった学習効果は副次的なもので、一番の狙いは脳の前頭葉を鍛えるということであった。前頭葉は集中力、記憶力、判断力、想像力、自制力、行動力をつかさどり、前頭葉の働きを活発にすることで学習効果が大きく高まり（＝理解力が高まることで教師の指示が一回で正しく通る、集中力向上で切替が早くなる）、さらには子どもの問題行動が減る（＝自制心、判断力が発達する）ということも学んだ。

このメソッドの効果はグアテマラの子どもにも表れることが実証できれば、グアテマラ現地の教育現場が抱える問題の主要部にリーチできるという画期的な指導法である。この研修は申請者を含めた全スタッフにとって大変有意義なものとなり、陰山メソッドは 7 月のタームから学習塾の指導内容に取り入れている。

- ③ 現地の若者と協働で塾生の社会科実習を行った。活動地在住の若者が米国の大学を受験する際、居住地での社会貢献活動を計画・実施する課題があるとのことで、学

習塾のうわさを聞きつけ共同で活動したいとの相談があった。

彼女が持ち込んだ提案内容の素晴らしさはさることながら、活動地で海外の大学進学を志す若者は稀有な存在なので彼女を応援したい気持ちもあり、依頼を快諾した。

活動は若者が主体となって、塾生の子ども達とともに自分たちができる社会貢献は何かを話し合い、ピザを販売してその売り上げを学習塾の本の購入費に充てるという企画を起ち上げた。ピザ販売を宣伝する動画やチラシの作成を行い、ピザの販売所として教会の一角を使用した。当日は子どもたちが主体となって、注文の聞き取り・会計・ピザの作成・ピザの供給・各種案内等を行い、ピザ販売は大盛況のうちに完売した。

後日、自分たちが稼いだお金を持って首都の本屋まで買いに行き、併せて首都の社会科見学も実施した。このような社会科実習は現地の公教育では機会がなく、塾生の子ども達に貴重な体験をさせることができた。

④ 塾生の子ども達の学習効果が目に見えて表れている。

- ・1ターム(10週間)継続して行った計算練習(1桁同士のたし算または掛け算の100マス計算)において塾生の全員がターム開始時の1/2以下のタイムで問題が解けるようになった。
- ・入塾時には、自己表現をあまり得意としなかった子供が、読書・作文クラスを通して、発言が増えたり、書く文章量が著しく伸びたりした。
- ・楽器演奏・図画工作のクラスを通じて音楽や美術に大きな関心を持った子供が複数名いた。申請者が代表理事であるNPO法人主催のオンラインクリスマスコンサートでは、1タームかけて練習したピアノ演奏の成果を12名の塾生が約50人のイベント参加者の前で披露し、好評を博した。
ピアノ演奏は2024年4月、6月時にも日本の方々に向けて中継披露している(3回とも異なる曲目を披露)。

⑤ 学習塾の塾生が7名(2023年7月開校時)→27名(2024年6月)になった。開校当初は思いつく限りさまざまな形での広報に取り組んだが、活動地初の学習塾ということもあり、開校時の入塾人数は当初の予想より大きく下回っていた。

しかし学習塾の活動の様子は口コミで少しずつ広がっていき、塾開校から数か月経った2023年12月あたりから入塾に関する問い合わせが時折来るようになった。これは現地にて常時活動していることが実を結んだ結果であるといえる。現地スタッフも2024

年 1 月に新たに 1 名加入した(新規スタッフは現時点で無償)。

3 (応募様式に記載した)期待された成果・効果と実際の相違点

異なる場合はその原因と対処内容、及びその対応による結果

申請時の書類に記載した内容は「一学年における塾生数が 30 人を超え、各々が学力を向上させる→3.5%ルールに則った効果、即ち塾生たちの学習成果がグアテマラ活動地の小学生全体の学習意欲や学力向上に繋がる影響を及ぼすことに期待。また本学習塾の卒業生が、身に付けた学力を素地として自身の将来の選択肢を広げたロールモデルとなることで、コミュニティ内の教育に対する意識改革の一助となる期待」である。

しかし、これは学習塾を数年運営し続けた後に期待される効果として記したもので(こちらの理解不足により本プロジェクト終了時に期待される成果・効果を申請書類に記さなかったことお詫び申し上げます)、塾開校 1 年でこの成果を期待するのは現実的ではない。

しかしながら、本活動を一年遂行したことにより、上記の期待される成果のうち「一学年における塾生数が 30 人を超え、塾生が通う小学校を通じて現地の教員や塾生外の小学生にも学習塾の学習効果が波及していく」ことは、3 年以内に形ある成果としてみられるのではないかとの見立てである。

というのも、2023 年 8 月時点と 2024 年 6 月時点での学習塾を取り巻く現地の環境や人々への認知度を比較すると非常に良い形で成長しており、また、塾生保護者の方々(現職教員も含まれる)や申請者が協力隊員時にお世話になった教職関係者の方々から数々の応援や協力を現時点でも賜っており、ここ数年のうちに現地公教育との連携教育を実現可能なものへと出来得る手ごたえも感じているからである。

4 活動成果の持続発展性

本プロジェクト終了後も、学習塾の運営事業は申請者が代表理事である NPO 法人が主体となって今後も継続していき、①塾生人数が増えることで、塾の教育効果が活動地の地域コミュニティにも及ぶような活動をする、②現地公教育とさまざまな形での連携方法を模索する、③日本人が活動主催者である特性を活かし、教育(交流)活動を通じてさまざまな形で日本との接点を作ることを中長期目標として活動を続けていきたい。

5 苦勞した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、それらを今後どのように活かしたいか、教訓等

グアテマラの活動地においては自身とは無関係の外的要因により計画が予定通りに進まないことは日常茶飯事であるが、当初の予測と大きく異なり一番不安に思ったことは、学習塾開校当時に集まった入塾希望者数が見込み数の 1/5 以下と判明したときである。

当時は需要の見込み違いであったかもと今後の塾運営そのものへの疑問も出てきたほどであった。しかし、現地協力者の方々から「まだ認知が広まっていないだけで、学習塾の需要は絶対にある」との励ましを受け、また国内の国際協力関係の方々からも「何事も初めてのことをやるときは、要不要に関わらず、現地の人を受け入れる(認知する)まで時間はかかるもの」とのご助言を受け、とにかくこの一年は継続して活動してみようと腹を括り、予定通りの教育活動を続けた。

その結果、開校して2か月後の塾生再募集時には地域内の口コミにより少しずつ入塾希望者が増え、半年後には募集告知をしていないにも関わらず、入塾への問い合わせがちょくちょく入るようになっていった。

ここから学んだことは、①下調べは重要であるが、それらの事例から予測できる数値を過度に信用しないこと(詳細は割愛するが入塾者見込み数も申請者のこれまでの経験や実査をふまえ、それなりに根拠があるものであった)、②直ぐに結果として現れなくても継続して活動することの大切さと大変さ(それなりにタフなメンタルが必要)、③広報や宣伝において一発で効果的に人々の認知に繋がるものは無く、コツコツと時間をかけて少しずつ広げていくもの、である。

6 ご自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

本プロジェクト終了後、2024年7月末に申請者は帰国。現在は同年10～11月に実施する学習塾現地スタッフの研修を兼ねた日本の大学の教育学部生との交流事業に向けて準備中である。

この交流事業は、グアテマラサイドには日本式教育の背景理解と現地人視点から見た参考となり得る教授法を探る機会を、日本サイドにはグローバル教育指導等で活かせる多様性の理解や多眼的認知を得る機会を提供する狙いである。

本学習塾運営を含めたグアテマラでの教育活動は今後も申請者が代表理事を務めるNPO法人の活動として続けていく。申請者の次回の現地渡航は2024年12月を予定している。